新藤兼人賞

SHINDO KANETO AWARDS

第 14 回新藤兼人賞

2009 年 12 月 4 日（金）東京會舘 11 階　ゴールドルーム

主催：　協同組合 日本映画製作者協会

特別協賛：富士フイルム株式会社／報映産業株式会社

協賛：松竹株式会社／東宝株式会社／東映株式会社／角川映画株式会社

コダック株式会社／株式会社ＩＭＡＧＩＣＡ／株式会社ファンテック

SARVH 賞提供：一般社団法人 私的録画補償金管理協会

金　賞

沖田修一『南極料理人』監督・脚本

授賞式当日沖田監督は海外映画祭に参加中につき、西ヶ谷寿一プロデューサーが代理で登壇

受賞者プロフィール　1977 年、愛知県生まれ、埼玉育ち。01 年、日本大学芸術学部映画学科卒業。数本の短編映画の制作を経て、02 年、短編「鍋と友達」が第 7 回水戸短編映像祭にてグランプリを受賞。短編『進め！』(05 年)が<黒澤明記念ショートフィルム・コンペティション 04-05>にノミネートされ、オムニバス映画『Life cinematic～映画的人生～』(06 年)の一編として劇場公開される。その他、『犬猫』(04／井口奈己)のメイキングも担当している。06 年、初長編監督作品『このすばらしきせかい』が、シネマロサにてレイトショー　公開され、好評を博した。映画以外にも TV ドラマの脚本・演出も手がける。本作で商業長編作品デビュー。

銀賞

田口トモロヲ監督『色即ぜねれいしょん』監督

受賞者プロフィール　1957 年東京生まれ。大学中退後、漫画家、ライター、イラストレーター等の仕事をしながらマイナー、アングラ、インディペンデントシーンで過ごす。演劇活動としては“発見の会”を皮切りに、劇団“健康”の旗揚げに参加。　同時期に、パンクバンド“ばちかぶり”を結成し、音楽活動も開始する。82 年に知人の紹介で『俗物図鑑』（内藤誠監督）で映画デビュー。その後、89 年に塚本晋也監督の『鉄男』に主演、脚光を浴びる。　みうらじゅんと 94 年末に結成したユニット　“プロンズ”で単行本「ブロンソンならこう言うね」（ごま書房）を刊行。シングルＣＤ「大脱走‘95/マンダム男の世界」アルバム「スーパーマグナム」を発売、　00 年から『プロジェクトＸ～挑戦者たち』（ＮＨＫ）でナレーションを担当するなど、多才ぶりを発揮。03 年に『アイデン＆ティティ』で監督デビュー。09 年度は映画『メリケンサック』（宮藤官九郎監督）、宮本亜門演出の舞台『三文オペラ』に出演。

ＳＡＲＶＨ

プロデューサー賞

安田匡裕『ディア・ドクター』企画・製作

西川美和監督が登壇

受賞者プロフィール　1943 年、兵庫県生まれ。大学卒業後に電通映画社に入社、ディレクターとして多くのテレビコマーシャルの企画・演出に携わる。同社退社後 87 年にテレビコマーシャルの制作を中心とする制作プロダクション、㈱エンジンフイルムを設立する。現役の演出家としてテレビコマーシャルの　制作に関わる一方で、映画のプロデュースにも意欲を示し、それまでに親交のあった相米慎二監督の『東京上空いらっしゃいませ』（90 年）で初プロデュースを果たす。以降、相米監督作品『お引越し』（93 年）、『夏の庭－The Friends－』（94 年）を立て続けにプロデュース。この頃より映画の製作に本格的に携わりだす。99 年には是枝裕和監督作品『ワンダフルライフ』をプロデュース、以降の『誰も知らない』（04 年）、
『歩いても 歩いても』（08 年）を含み、『空気人形』に至るまでの是枝監督の全作品の企画・製作者として欠かせない存在となる。
また、西川美和監督のデビュー作『蛇イチゴ』をプロデュース、以後『ゆれる』（06 年）、『ディア・ドクター』（09 年）を企画・製作し、積極的に西川監督を支援する。これまで企画・製作で関わった映画は前述のタイトルを含め 24 本。なお 09 年、『歩いても 歩いても』の製作に対し、第 28 回藤本賞特別賞を受賞する。2009 年 3 月に急性心筋梗塞で死去、『空気人形』の完成を待つことはなかった。

金賞・銀賞選考委員講評

審査委員長：山上徹二郎（シグロ）

今年の新藤兼人賞候補作品は 126 本が対象となり、5 名の審査員による第 1 次審査でその内から 22 作品が選ばれました。結果、金賞は『南極料理人』の沖田修一さん、銀賞には『色即ぜねれいしょん』の田口トモロヲさんが決定しました。沖田修一さんは今回の受賞対象作品が 2 作目となりますが、切れ味のいい演出でしっかりとしたエンタテインメント作品に仕上げている点が高く評価され、今後の活躍を期待させる監督として金賞に選ばれました。　また、銀賞に選ばれた田口トモロヲさんも 2 作目での受賞となりました。今回の受賞対象作品の面白さとともに、独自な映画世界を展開する作家としての評価が決め手となりました。

最後まで選定に残った監督として、『ウルトラミラクルラブストーリー』の横浜聡子さん、『不灯港』の内藤隆嗣さん、『ドロップ』の品川ヒロシさんの三人の名前を挙げておきたいと思います。また近年質の高いドキュメンタリー映画の製作本数が増えていて、受賞対象作品にも挙がるようになってきていますが、ドキュメンタリー映画を劇映画と同じテーブルで論じることの難しさを感じた審査でもありました。受賞されたお二人の監督はもちろんのこと、審査対象となった 126 人の新人監督の今後の活躍が、日本映画の発展に欠かせない原動力になることを念じて、今年の新藤兼人賞を贈りたいと思います。

岡田 裕（アルゴ・ピクチャーズ）

劇場で上映された作品が三本以内の監督を対象としての新人賞なのだが、まずはその規定にあてはまる作品が 126 本に上るということを知って驚かされた。今年封切られた日本映画の三分の一近くになるのではないか。このことは、世界的に見ても、或いは長い日本映画の歴史から見ても稀有の現象であると思う。この現象から日本映画界の今日の有り様の何が見えてくるのか、一度分析して見る必要が有ると思う。それはさておき、まずは金賞となった「南極料理人」。劇的には何も起きない。誰か一人のドラマに執着して描いていくものでもない。　此の頃流行のゆるキャラのほのぼの感と、おいしそうな料理をカタログ的にまとめることで、南極という特異な舞台で、今の日本の普通の人の普通の感性を描きだしたセンスを買う。銀賞の「色即ぜねれいしょん」。古今東西で何百本も創られた青春映画。青春とは恥の連続なんだということを自分の周囲の事柄から発見して、ディテールを丁寧に描くことで新鮮な青春映画は何本でも成り立つ。映画はディテールをどう描くかで決まるのだということをこの監督は心得ている。たまたまこの二本はほのぼの感のある新人監督作品だったが、もう少しギラギラしている作品「ウルトラミラクルラブストーリー」（横浜聡子）や「鈍獣」（細野ひで晃）といった作品も心に残った。

佐々木史朗（オフィス・シロウズ）

沖田くんの「南極料理人」は映画を作ること、見ることの楽しさに溢れた作品でした。思い出してみると彼の映画には「たべもの」がよく登場します。「鍋と友達」ではキリタンポ鍋が、「鷹匠」では寿司が重要な役割を果たしていました。「南極料理人」を見たある人が「ラーメンを食べたくなった」と云ってましたが、「食べる」という日常的なことへの偏愛が沖田くんの映画を心楽しくしている大事なことがらのひとつであるようで、そういう丁寧さやこだわりを持ってこれからも映画を作ってほしいと思います。

田口トモロヲさんの「映画への愛」には感動させられます。ナレーターや舞台俳優としての活動、「ブロンソンズ」でのユニット活動、ミュージシャン、イラストレイターとしてなど現在にいたる田口さんの活動は私たちのよく知るところですが、監督としての二作品はいずれも映画に真摯に向かい合う気迫に満ちたものでした。今後も田口さんにはぜひ映画を作り続けてほしいと強く思うのです。

桝井省志（アルタミラピクチャーズ）
私の賞の選考基準は初々しさと可能性です。選ばれた二作品はまさにそれにふさわしい作品です。『色即ぜねれいしょん』はあらゆるありがちな青春映画の常套手段を用いながらも、そこには田口トモロヲ監督の前作から持ち続けているこだわりとその映画世界を確実に感じ取ることができました。長年の俳優としてのキャリアに負けることなく持ち続けたピュアな精神とまたその経験がいかされた見事なキャスティングとその演出力で楽しい作品となりました。『南極料理人』は欠点も含めて、新人ならではの楽しさがいっぱいちりばめられた作品となりました。劇場での観客の反応もたいへん良いものでした。　観客を置き去りにしないで自分の表現を全うした沖田修一監督の可能性に期待したいと思います。

三宅澄二（ミコット・エンド・バサラ）
沖田監督、田口監督おめでとうございます。「南極料理人」は南極という極限状況の中で料理をメーンに、ほのぼの暖かく進んでいく物語にいつしか引き込まれていました。どのような状況においても‘食べることは生きること’で、主題の料理に対してかなりの拘りを持って取り組まれており、沖田監督の今後の作品が楽しみでなりません。
「色即ぜねれいしょん」は平凡な日常の中で感じられる‘心の暖かさ’を主人公の高校生のみならず大人のキャラクターまで、とにかく活き活きと描かれており、幅広い層の共感を得たのだと思います。田口監督にはこれからも是非映画を撮り続けてほしいと思います。

SARVH　プロデューサー賞選考委員講評

佐々木史朗（オフィス・シロウズ）日本映画製作者協会 副理事長
今年の SARVH 賞は故人に対して贈るという異例の結果となりました。それほどに安田匡裕さんの企画者としての活動が素晴らしいものであったということです。「ディア・ドクター」はもちろんのこと、今秋公開された「空気人形」、それ以前にも「歩いても歩いても」「ゆれる」など数年にわたって安田さんが企画され映画化された数多くの作品のいずれもが高い質を持つ映画作品として完成されており、私たちプロデューサーを刺激し、励ましてくれていたことに感謝したいと思います。
氏は「ディア・ドクター」の完成はご覧になっておられましたが、公開の成功までは知ることなく亡くなられました。「空気人形」が完成に近づいている三月でした。この二作品の劇場公開を見ておられたらと、それを思うと残念ですが、映画を統率していく氏の一貫した姿勢、良質な作品にするためにはらわれた努力、それらが今後の日本映画の製作に引き継がれていくことを願いながら、今回の贈賞を決定した次第です。